



日语语言专题研究

王欣 张晓东 著

线装书局

图书在版编目 (CIP) 数据

日语语言专题研究 / —北京:线装书局,
2008.10

(社科文献论丛第9辑/马福贞主编)

ISBN 978-7-80106-853-8

I. 日… II. ① III. 日语—语言学—专题研究
IV. H36

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2008) 第 160581 号

日语语言专题研究

著 者

责任编辑:杜 语 孙嘉镇

封面设计:张玉霞

监 印:初 仁

出版发行:线装书局

地 址:北京鼓楼西大街 41 号(100009)

经 销:新华书店

印 刷:北京忠信诚胶印厂

开 本:880mm×1230mm 1/32

印 张:10.5

字 数:263 千字

版 次:2008 年 10 月北京第 1 版 2008 年 10 月第 1 次印刷

印 数:2000 册

书 号:ISBN 978-7-80106-853-8

全套定价:261.00 元(本册:23.80 元)

前 言

教而不研则浅,研而不教则空,日语教学的研究只有利用日语语言学的研究成果才能保证走上科学化的道路,日语语言学的研究也只有与日语教学的研究相结合才能体现其应用价值,本书的研究选题均来源于教学实践。这些问题的阐释与论证,互为关联,互相照应,自成一体,以一个相对完备的逻辑体系,对日语教学具有较强的实践指导意义。如:“日语常用汉字读音、意义、语法结构三者间的相互关系”。本书认为:日语中的汉字普遍存在着一字多音现象,这给日语学习造成了不小的负担。如能发现探明一字多音现象其内部存在的某些规律法则,毫无疑问,这将会给加深记忆和理解单词提供帮助。为此,著者就日语汉字的音读问题,针对日语常用汉字表中的261个一字多音汉字,从词汇角度对一字多音的分布情况以及汉字在词汇中的读音、意义、语法结构三者间的相互关系进行了详细的考察。

研究结果显示同一汉字的不同音读在词汇量和词频的统计上,整体呈现偏向一边的趋势。部分汉字的不同音读在意义和语法结构上出现有规则的对立分布。同时,词汇量多语素含义丰富的汉字容易出现一字多音现象且不同读音各自承担不同的义项。著者深信活用这些规则将有助于记忆和理解日语中的汉语词汇。

日语的时间表现研究成果很多,金田一(1976)、铃木(1976)、高桥(1976)、奥田(1978)、寺村(1985)、三原(1995)、工藤(1995)等对日语的时态和体进行了深入的研究,但这些研究多考察句末谓语的时态和体。其中部分研究,如寺村(1995)、桥本(1995)、岩

崎(1999)等注意到了从属节和句末时态、体的差异。寺村(1985)中指出在所有的从属节中,连体修饰节的时态和体的表现最为复杂。迄今为止,关于连体修饰节时间表现的研究,主要是从时态方面进行的。但是有一类连体修饰节,其所表示的事态并非发生在特定的时间内,于是不可能借助于关于连体修饰节时态的先行研究进行解释。本书参照高桥(1991)的研究,把这类表示的事态并非发生在特定时间内,而表示被修饰名词属性的连体修饰节称作“属性连体修饰节”,以关于时态和体的先行研究为基础,特别参照工藤(1995)的“基本体?时态的体系”,考察属性连体修饰节的体。研究结果如下:属性连体修饰节表示的事态不与特定的时间发生联系,而表示被修饰名词的恒常属性,所以不能表示时态的意义。另一方面,通过对例句的分析发现属性连体修饰节中谓语的スル形、シタ形、シテイル形可以表示体的意义。

スル形可以表示动作持续体,或者不表示任何体的意义。

シタ形可以表示完成体或者结果持续体,具体表示哪种体,与谓语动词的类型有关,也可以不表示任何体的意义,像形容词一样,表示状态。

シテイル形可以表示动作持续体或者结果持续体,具体表示哪种体,与谓语动词的类型有关,也可以不表示任何体的意义。

シテイタ形因为始终表示过去时的意义,所以不能出现在属性连体修饰节中。

本书的其他选题也都与教学时间密切结合,观点新颖,对日语学习者具有较强的启发作用。本书肯定还存在不足之处,欢迎读者批评,指正。

著 者

2008年10月于浙江工商大学

目 录

第一章 漢字の読み分けと意味・語構成の関係	1
汉字的读音和意义、词语构成的关系	
1.1 漢字と読み	2
汉字和读法	
1.2 先行研究	10
前期研究	
1.3 研究方法	19
研究方法	
1.4 質的分析	23
定性分析	
1.5 量的分析	45
定量分析	
1.6 教育への応用について	66
在教学实践中的应用	
1.7 むすび	71
结论	

第二章 現代日本語における呼称語 91

现代日语中的称呼语

2.1 複雑な呼称語 92

复杂的称呼语

2.2 呼称語の様々な表現方式 101

称呼语的表现方式

2.3 呼称語の特徴とその原因 122

称呼语的特征和原因

2.4 呼称語と日本の人間関係 149

称呼语和日本的人际关系

2.5 おわりに 157

第三章 属性連体修飾節におけるアスペクト 162

属性定语结构的体

3.1 はじめに 162

引言

3.2 日本語のテンスとアスペクト 171

日语的时和体

3.3 属性連体修飾節のアスペクト 178

属性定语结构的体

3.4 属性連体修飾節におけるシテイルのAspect ……	191
属性定语结构シテイル的体	
3.5 属性連体修飾節におけるシテイタの欠席 ……	194
属性定语结构シテイタ的缺失	
3.6 まとめ ……	195
结论	
第四章 「格助詞十の」構造と連用格との対応関係 …	204
“格助詞十の”结构和连用格的对应关系	
4.1 序論… ……	204
序论	
4.2 ヘノ構造と連用格の対応関係 ……	214
“ヘノ结构”和连用格的对应关系	
4.3 デノ構造と連用格の対応関係 ……	230
“デノ结构”和连用格的对应关系	
4.4 デノ構造に言い換えられる「デ格」及びヘノ構造に言い換え られる「ヘ格」の意味特徴 ……	236
“デ格”和“ヘ格”的意义特点	
4.5 デノ構造、ヘノ構造と対応できるヲ格、ニ格の意味特徴 …	243
和“デノ構造、ヘノ構造”对应的“ヲ格、ニ格”的意义特点	
4.6 結び ……	255
结论	

第五章 感覚名詞の連体修飾構造	261
感觉名词的定语结构	
5.1 はじめに	261
引言	
5.2 感覚名詞の意味的特徴と連体節の分類	269
感觉名词的意义特点和定语的分类	
5.3 感覚名詞が物理的な感覚を表す場合	274
表示物理感觉时	
5.4 感覚名詞が心理的な感覚を表す場合	290
表示心理感觉时	
5.5 「連体節＋感覚名詞」の形成要因…	302
“连体節＋感觉名词”的形成原因	
5.6 終わりに	305
结论	

第一章 漢字の読み分けと 意味・語構成の関係

近年、日本国内で日本語に関するテレビ番組、実用書、パズル雑誌などよく見かけるようになり、また海外で外国人日本語学習者が急増していることから分かるように、世界範囲で日本語に対する関心度が非常に高まっていると言えよう。その中に、漢字がひと際注目されているようである。漢字が多くかつ重要な問題点を抱えていることはいうまでもないが、ここで漢字の問題点を学習・教育という視点から考えてみたい。個人の経験だが、筆者が日本語を勉強し始めて間もない頃、「芸人/芸能人」、「世紀/世代」、「批判/評判/審判」といった語の読み方に苦勞していた思いを覚えている。のちに語彙量が増えるにつれ、いくらか状況が改善されてはいるが、今も日本語の新聞を見たり小説を読んだりして、ときどき新しい語のところにつまずき、最悪に辞書を引いて見つからない場合も少なくない。一方、教育現場において、漢字の読み書きや熟語の理解などの難題があり、それによる日本語習得の負担が大きいことは、周知のことである。

本論文では、日本語の中にある複数の字音をもつ漢字に焦点を当て、その読み分けと意味、語構成との関係について考察する。それを通じて、漢字を仲立ちに異なる音形が共存している現象の本質に迫り、複数字音を有する漢字の音読み現状を明らかにすることによって、日本語教育の難点である漢字教育に何らかのヒントを提案すること、また現在審議中の常用漢字改訂に幾分か貢献することを目的とする。

漢字の字音に対する考察を始める前、ひとまずここで漢字に関連するいくつかの基礎事項を分類整理し、日本語の漢字の特徴を全体的に見渡しておいて、それから先行研究をへて本格的考察に入りたいと思う。

1. 1 漢字と読み

日本語の漢字については、同じ読みに多数の字があり、また一つの字に複数の読みを有する場合が多く、漢字の読みに複雑な様相を呈している。

漢字の読みにまず訓読みと音読みという二系統^①があり、さらに一字に複数の訓読みと音読みを有するものも少なくない。社団法人日本語教育学会(2005)によると、常用漢字で、一字が平均 2.1 音あり、445 字が2つ以上の訓読みを有するという。その上常用漢字表に採用されていない「字音」、「字訓」を加えると、その数がもっと多くなるであろう。

字音については、野村(1987,1999)が漢字の字音は音列の組み合わせにバラエティーが乏しく同音や類音が多いと指摘している。一つの例をあげると、「コウ」と「ショウ」がそれぞれ60 種以上の漢字が共有している。

漢字の読み方が多くて複雑である背景にはいろいろあるが、ここで字音にしばって考えてみたい。字音は、中国での発音が日本に伝わった時代やルートの違い、また長年日本での歴史的変化によって生じたと考えられる。その時代とルートの差によって、字

① 水谷静夫(1987)では、音と訓との区別は概念上明らかであるが、細かく論ずると何とも困るのもあると指摘しており、その例に「寺、絵、文、銭、漁」が取り上げられている。

音は古音、呉音、漢音、唐音^①と四つに分けていとされる。現代日本語の漢語には、漢音が最も多く、呉音がこれに継ぎ、古音と唐音がわずかしかないう。また、千年以上漢字が日本語に溶け込み、一部の漢字が使用上による間違った読みくせが定着してしまうことで、いわゆる「慣用音」が生じたわけである。その数は少なくなく、成春有(2002)によると常用漢字範囲で200近くもあるそうである。漢音と呉音の関係については、歴史上漢音が長く「正音」とされ、呉音の廃止や漢音による交替など行われた時期もあったものの、いち早く日本に伝わり定着した呉音を駆逐するまでには至らなかった。その複雑な事情があるため、未だに漢音か呉音かの判定は辞書によって異なる漢字が数多く残っている。

以上、漢字の字音を字レベルで見えてきたが、ここから字音を語レベルで現れた姿を見てみたいと思う。上に呉音、漢音、唐音、慣用音を述べてきたが、それらが漢語の読み方に反映しているとき、実にバリエーションに富んでいる。「社会」のように「漢音+漢音」と、「人間」のように「呉音+呉音」といった読み方が多くあるのは言うまでもないが、「言語(漢音+呉音)」、「図解(呉音+漢音)」、「磨耗(呉音+慣用音)」、「弟子(慣用音+漢音)」など交ぜ合わせた語もあり、また、重箱読み、湯桶読みと言われるような字音と字訓が組み合わせたものもある。

漢字が組み合わさって漢語になると、構成要素の漢字がいつもと違う発音に変わってしまうことがあり、いわゆる変音現象である。日本の漢語の場合、濁音または半濁音化、連声、促音化、長呼、短呼、音訓交替などの変音現象が見られる。「暗算、反発」、「陰陽、

① 主に禅僧や貿易商などによって日本に伝来した音読みであり、唐末から、宋、明、清の初期の中国語の発音によるものであり、「唐宋音」とも呼ばれる。本稿では呼び名を「唐音」に統一している。

観音」、「日記、国家」、「詩歌、富貴」①、「先生、本当」②、「阪大、落研」のように語例に含まれる太字の場合が、それぞれの変音現象に当たるものである。

1.1.2 漢字と語構成

1.1.2.1 漢字と形態素

言語学では意味を有する最小の言語単位を形態素③という。理論的に語が形態素からなり、形態素が語の構成要素あるいは造語要素であると考えられる。したがって、表意文字④とされてきた漢字が形態素を表しているわけである。漢字の形態素の扱いをめぐって、主に「漢字形態素」と「字音形態素」という二つの異なる主張がある。前者は森岡(1968,2004)をはじめとして主張され、後

① その他に「披ろう(ろうに)、御くう(くうに)」についても、長呼の例と筆者は考える。

② これらは話し言葉で見られるもので、実際表記上「ホントウ」と「ホント」両方が書かれるケースがあるため、表記のゆれとも考えられる。

③ 「ずたぶくろ」の「ずた」、「すき焼き」の「すき」、また一部の慣用句の構成要素など、現代語意識で、意味がはっきりしないものも存在し、これらを特殊な形態素とされている。それに対して、複合語や慣用句は、構成要素の組み合わせ全体で現実の一片断を名づけているのであるから、構成要素の意味が希薄であってもかまわないのであるといった指摘がある。

④ 「徊、翊、琥、蚰」など一部の漢字が単独で字音を有しているが字義を表していない、単語になれない。しかしその漢字の機能から、形態素として「表語」の働きをしていると考えられる。漢字の表意問題については、叶蜚声・徐通鏞(1997)は漢字が表音と表意を兼ね、形態素または語を記していると述べており、犬飼(2002)が漢字には語と形態素とを表すものと専ら形態素を表すものがあり、述語が簡略であるべきなので総じて表語文字と呼ぶと論じており、森岡(2004)、社団法人日本語教育学会(2005)では漢字が「表意」、「表語」より正確に「表形態素」とであると主張している。本稿においては、漢字が「表形態素」である立場をとっている。

者は野村(1979,1999)をはじめとして主張されている。

森岡(1968,2004)は、言語について「音声」と並んで「文字」が意味表示の働きをしており日本語における漢字を形態素と認め、漢字を仲立ちに字音と字訓の間が異形態のような関係と捉え、「文字形態素論^①」を主張している。

それに対して野村(1979,1999)から批判がある。批判の主な点は、①漢字は概念と結び付くことになるが、それには音声を介することが必要となり、文字は音声に対して二次的な存在である。②森岡の漢字形態素の分類で漢字1字がつねに1形態素に相当することを前提にしていると、成り立たない。③字音と字訓が、形態的に明確な違いがあり、異形態関係ではない。

一方、野村(1999)では、漢字が出自を異にする複数の形態素と対応することを認める。中国語の形態素が日本語の音韻構造の制約のもとに日本語の形態素として定着したものを字音形態素と定義し、和語形態素、洋語形態素と並ぶ。また、「同一漢字における複数の字音は別の形態素としてあつかうのが妥当である」と述べている。

以上の主張について筆者としては、森岡論文の主張が興味深いものであるが、その問題点が少なからず存在していることも明らかであることで、本稿では野村論文の字音形態素という立場で考察を展開することにする。

語の構成要素である形態素が、形態的に単独で語を構成し運用できる自立形態(自立形式とも呼ばれる)と、単独で語になれない結合形態(結合形式とも呼ばれる)とに、二分されている。漢字を見ると、①「案、愛、恩、気、脳」などは自立形態にあたる。②「信ずる、単に、察する、学校、医院」のように下線を引いた漢字は結合形

① 文字に基づく形態論部門を立て、文字形態素の種類、変化、結合を分類し、語構成の方法を記述するという。詳細は森岡(2004)に参考されたい。

態にあたる。③「署、局、県、学、券」などについては、略語として使えないわけでもないので、自立形態よりと考えられる。④「哲、査、磁」になると微妙になる。結合形態は明らかであるが、字音形態素と言い切れるどうかの疑問がある。森岡(2004)では「これらは概念にあやふやで単独で理解しにくいが、「哲学、哲理、捜査、検査、磁気、磁石」といった語を連想して考えれば、理解できなくもない」と述べている。それが「宇宙、挨拶、犠牲」を見るといっそう明確になるであろう。筆者は、「挨拶、犠牲、葡萄、檀那、曼荼羅」など一部の漢語を除き、基本的に一字が一形態素を表していると考ええる。そして、漢字の字音形態素について全体的に、単字で自立しているものが少なく、大多数が結合形態となっている。

1.1.2.2 漢字と語基・接辞・造語成分

語構成には、動的に語の成り立ちを扱う語形成と、静的に語の組み立てを扱う語構造という両側面がある。本稿は、語彙データベースを中心に考察するもので、主に語の組み立てを分析する。

語を構成する観点から、語構成要素としての形態素を「語基」と「接辞」とに二分される。語基は、実質的で明確な意味をもち語の基幹的部分として働き、一方、接辞は語基を意味的にまたは文法的に補佐する役割をしているとされる。

例えば「素肌」の場合、「素」が接辞に、「肌」が語基にあたる。しかし、実際に語を扱うときこの二分法は問題を抱えている。例えば「打ち上げる、打ち払う、打ち込む、打ち解ける」と語を並べてみると、語構成要素の「打ち」は「語基」から「接辞」に役割が変わっていく。つまり、語基と接辞は連続的なもので、両者の間に線を引くことは難しいといわなければならない。

日本の漢字漢語について語基か接辞かの観点から見ると、「愛、胃、駅、文」など典型的な単字語基と、「御」という代表的な接辞がある。また、「珊瑚、淘汰、犠牲、国際、民主」など二字漢語全体が一複合語基とみなすものもある。問題となるのは、「湖」、「新」、「性」な

ど二字漢語では語基だが、三字漢語では接辞的なところがある漢字である。そのため「接辞性字音形態素」「準接辞」や「造語成分」といった用語が用いられるようになっている。

さて、造語成分はどういうものなのかを見てみよう。これもまた意見が分かれているようである。社団法人日本語教育学会(2005)によると、①自立的成分かどうか問わず複合語と派生語を構成するすべての単位を造語成分と呼ぶ。②海(カイ)、「岸(ガン)、ほの」など、接辞を除いた非自立的な成分が造語成分と呼ぶ。③接辞を含めた非自立的な成分を造語成分とする。以上の3種類の定義を見ると、①は制限がもっともゆるい②はもっとも厳しい③は中間的な存在であるといえよう。

ここで、本稿の考察に用いられる「現代雑誌 200 万字言語調査語彙表公開版(ver. 1. 0)①」という語彙データベースにおける「造語成分」の扱いをことわっておきたい。この語彙データベースにおける「造語成分」の扱いは③に近い立場を取っているようで、漢字漢語を中心として造語力が高いものを取り上げている特徴がみられる。本稿は、この語彙データベースを尊重し、それにしたがって扱うこととする。

1. 1. 3 漢字と位相

言葉は、職業・集団・階層、世代・年齢、地域・方言などの差によって同じ事物をさすとき、違いが生じることがある。この現象

① この調査語彙表は、国立国語研究所によって行われた、研究課題「現代日本語における書き言葉の実態解明と雑誌コーパスの構築」における「現代雑誌 200 万字言語調査」の研究結果で、学術研究・教育利用を目的として国立国語研究所ウェブページ <http://www2.kokken.go.jp/goityosa/index.html>において公開され、筆者が2006年10月3日にダウンロードしたものである。現代雑誌 200 万字言語調査は、1994年に発行された雑誌の中から70誌を対象とした文字・表記、語彙に関する標本調査である。

を言葉の位相と呼ばれる。漢字漢語にもそういう位相性が見られる。

漢字漢語の表記の位相性については、笹原(2006)では、縁起かつぎのため相撲文字のように太く書いたり、「豆腐」を「豆富」に書き換えたり、また差別や不快をなくす意識によって「障害」「子供」を「障碍」「子ども」に書くなどたくさん例を取り上げられている。

漢字漢語の読みにも位相性が見られる。呉音は、仏教用語と日常生活に関する言葉に数多く存在している。一方の漢音は、漢文漢籍とともに伝わり長く正音として奨励され、政治や学問など文化的に優位な階層でよく用いられる。特に触れておきたいのは、明治時代西洋文化が流れ込み、大量の漢語が知識人によって新しく作られたことである。そのとき漢音読みが好んで用いられ、現代語に影響を及ぼしてきたそれらの漢語は多く漢音で読まれている。そして、音体系を成している呉音、漢音に対して、唐音は渡来したものの名や音宗関係のわずかなことばに見られ、音体系をなしていないと思われる。

意味や文体上、漢語は学術用語など抽象概念を表す語彙が多く、硬くて改まった文章語的な特徴をもっている。野村(1993)では現代漢語の位相的特徴について以下のような指摘があり、括弧内はその具体例である。①一般語と専門語の対立(のど/咽喉、結婚/婚姻)②日常語と雅語の対立(健康と健やか、病気とやまい)③文章語の日常化(抵抗する、保証する、質問する)④新旧の対立(女性と婦人、公務員と役人)

1.1.4 漢字と日本語教育

日本語教育において、「漢字」が大きな障壁と捉えられてきている。漢字系学習者も非漢字系学習者もさらに日本語母語話者までそれぞれいろいろな問題を抱えており、本稿は漢字教育の改善を主たる目的とするものではない。しかし、教育現場へ応用するこ

とを考え、関連することがらを簡単に紹介したい。

漢字教育は漢字だけは稀で、語彙の指導と関連させて進められているのが一般である。山下(2004)が日本語の語彙に漢語の比率が高く、特に中・上級の語彙学習においては漢字語彙の学習が中心になると述べている。本論文は、語彙を対象に漢字を考察するのもそれが一つの理由である。

漢字の指導では、漢字の「形」、「音」、「義」という三つの側面から行われるのは言うまでもない。眞(1976)が「学習者が日常的に使われている漢字に対し、漢字の形・音・義の持つ構造的性と体系的性を正しく理解し、その中に含まれている論理的なものとは情緒的なものとを認識し、自分なりにできるだけ有効にコード化して活用し、中級上級と進む中で自律学習できるように指導することが望ましいと考える」と語っているのである。

漢字学習の問題点は、ここで学習者別に整理してみたいと思う。まず、漢字系学習者から見てみると、母国語の影響(特に中国語の漢字を既に習得している学習者)から、漢字の「形」と「義」の結びつきが比較的容易で、漢字を見てそのまま意味を理解しようとし、また、母語と日本語との音韻体系の類似から推測したりして、「音」としての読み方の学習がおろそかになりがちである。一方、非漢字系学習者は「形」、「音」、「義」をすべて一から学ぶものでハードルが高く、特に「形」の認識と再生が最も困難とされる。が、中上級レベルになると漢字系学習者と同様に困難を感じるであろうということも指摘されている(山下(2004))。ここで、読み方を「形^①」と「義」と関連させて学習すると語彙習得の効率が上がるのではないかという考えは、本稿を書く動機付けの一つでもある。

① ここでいう「形」は「字形」ではなく、語レベルの形式であり、具体的に前後位置や接辞的用法などを指す。